

Q & A

※出典:「日本生協連の CO・OP 商品の食品添加物基準の変更について」 日本生協連

「これまでも これからも 食卓の笑顔のために」 日本生協連

	質 問	回 答
①	<p>安全性が確認された食品添加物は、どんどん使っていくのですか？ なるべく使わないでほしいと思います。</p>	<p>生協はこれまで、食品添加物を使用しなくても「おいしさや品質」などの食品の価値で遜色のない(コープ)商品を生み出す技術をメーカーとともに確立してきました。使わなくても商品の価値を実現できる食品についてまで、積極的に食品添加物を使用するという立場ではありません。食品添加物を使用することで消費者にとってより価値がある食品ができる場合については、安全性を確認した食品添加物を使用するという考え方でのぞんでいます。</p>
②	<p>今は不使用添加物でも、使用しても問題なしと評価が変わることもあるのですね？</p>	<p>さまざまな研究が行われ、データが揃って、食品添加物の評価が変わることは今後もあります。食品添加物を気にして、表示を確認したり、ふだんの暮らしの中で気をつけている組合員さんもいらっしゃいます。だからこそ、都度、評価を行い、基準を変え、そのことについてきちんとお知らせすることが大切だと考えています。</p>
③	<p>生協の自主基準も良いが、きちんと国の基準を整備し、日本の食品の安全に貢献してほしい。</p>	<p>これまでも、世の中全体の基準が良くなることをめざして、行政に対して署名活動を行ったり、意見書を提出したり、生協として社会的な取り組みを進めてきました。自主基準とあわせて、不使用や使用制限添加物のリスク評価やリスク管理を適正に行うように、行政への要望を提出しています。現在も、日本生協連を通じて、消費者組織と事業者の両方の立場から政府の審議会などに積極的に関わることで、食品安全行政に意見を反映しています。その内容は以下のサイトでご覧いただけます。 日本生協連 政策提言 検索</p>
④	<p>一つ一つの化学物質の安全を確認してもいくつかの化学物質の複合的な影響があるのでは？</p>	<p>体内に取り込まれた複数の化学物質による「複合影響」については特に医薬品との関連で多くの研究がされてきました。医薬品は病気の治療を目的として人体の機能に影響を与える用量が投与されるものであり、複合的な影響が現れやすいとされています。しかし、食品添加物や農薬については人が摂取する量は許容量を超えることがないように基準が定められています。この基準は動物でなんら影響が出なかった量の 100 分の1以下に設定されていることから複合的な被害が発生する可能性はきわめて低いとの見解が「食品安全委員会」でまとめられています。また、国際機関の見解も同様です。</p>
⑤	<p>基本は国の基準で、生協として部分的にしか自主基準をもたないものは生協の取</p>	<p>生協として自主基準をもった背景には食品添加物のデータを開示しないなど食品行政のあり方に問題があったからです。このため、自主的な基準をつくり、CO・OP 商品の安全性の確保に努めてきま</p>

<p>り組みが後退したように感じます。</p>	<p>した。その後、生協は CO・OP 商品の安全だけではなく、社会全体の「食品の安全」のために食品安全行政のあり方を変えていく取り組みを進めました。こうした取り組みにより食品安全行政は大きく前進しました。現在は、一つ一つの化学物質のリスクは食品安全行政で評価され、その資料や議事録もすべて公開をされています。そして、消費者もこうした論議に意見を述べるできるようになっています。大切なのは、こうした仕組みが形骸化しないように、消費者団体としてしっかりと参加することです。そのことが国の施策を補完し、信頼感を高めることにつながると考えています。</p> <p>国のリスク評価をもとにコープ商品の基準を考えることは、取りもなおさず生協として、行政の行ったリスク評価やリスク管理について、生協として検討し組合員に説明し、ご意見をいただくこととなります。そのことが、より多くの消費者が食品安全行政に参加し、監視していくことにつながると考えています。後退ではなく、新しい発展段階だと考えています。</p>
-------------------------	---